

死闘 30 分 飛水峽に挑む

渡 部 里 美

飛水峽、飛驒川中流域日川から御座野へ至る間 10 数 Km を広い意味で飛水峽と言うが、狭くは勝から上麻生までの 2 Km 余りを言う。2 Km の間河原は 1 カ所もなく兩岸絶壁となっている壁の高さは 10 m から 20 m である。この間の川幅は 5 m から 15 m である。上流下呂附近において 50 m ほどの川幅がこの地点において 5 m になるという事からしてこの地点での川の様子が想像しただけで分ると思う。流れは異様に速く、水面は泡立っている。飛水峽とはよくつけたものである。

我々ボート班は 3 月 23 日 新大阪駅を 10 時 50 分の快速に乗り一路飛驒川へ、下呂着 4 時 30 分である。3 月 24 日、昨日からの雨がまだ降り止まない。天気図によると日本列島は気圧の谷に入っている。2・3 日は天気がくずれると思われる。昼になって雨は止んだ。しかし時間の関係で今日は沈することにした。昼から全員下呂の合掌村を見学に行く、但し金がないので外から見ただけである。金のある世の中に疑問を感じる。じっと手を見る。山上の展望台から飛驒川を見る川幅 50 m がいっぱい黄土色の濁流と化している。夏合宿の時の事が思い出される。明日の朝までには色がきれいになっているであろうことを願う濁流よりは緑色のすんだ川の方が良いにきまっている。

3 月 25 日 曇、朝食をとり用意をする。全員パウダーでウェットスーツを着る。8 時 53 分 サボートの田中に見送られて OB 引地さん、前田さん 真鍋と僕の 4 人は出発した。前部右舷に真鍋、左舷に僕、後部右舷に前田さん 左舷に引地さんの構

成で行動することにした一昨日以来の雨で川は増水し、夏合宿と同じような苛酷な条件を押しつけて来た。しかし我々にはこれをはねのける自信があった。それは今度のメンバーが夏の時とは違うこととボートも夏合宿の時 6 人用ボートではなく約 2 倍ほどもある 10 人用ボートであることであり、これが我々に最大の勇気を与えた。出発して約 30 分ほどして夏合宿の転覆現場にさしかかった。この地点は全体が右にカーブしている所でありその曲点の真中には太岩が中州のようにすわりこんで水を 2 つに分けている。増水してさえいなければ、水は全部右側を流れているはずである。夏合宿の時は、川のほぼ中央近くを航行し大岩のすれすれに右へ行った為大岩からの返し波をもろに受けてしまい転覆してしまったのである。今回、我々は右端から侵入することにした。大岩からの返し波はそれでもそうとうにきつかった返し波はボートの横にぶちあたって来た。瞬間我々は波の頂上にいた。我々はシーソーに乗ったように上下運動を繰り返しながら高さ 1 m ほどの大波をいくつも越していった。このような状態はその後も続いていた。岩などはほとんど見あたらない。10 時 30 分 ころ大波によってボート内に水がいっぱいになった。ほとんど操縦不可能となった。しかし流れは速く岸に寄せることすら容易に出来ない。我々のボートは流されたままの状態が続いた。これによりボート内部に水が入った場合は水がいっぱいになる以前に対処することが必要であるとお知らせされた。幸い左岸にボートをザイルで

確保して、水をかい出すことが出来た。しかしまた10分後には水でいっぱいになるといった状態が焼石まで続いたのである。出発してから2時間ほどたった頃、突然1.5mほどの高波にあおられ後部に乗っていた前田さんと引地さんの2人が投げ出された。あっという間に2人は水中に消えたまもなく引地さんが水中から赤い顔をして姿を表わした、次に前田さんの背中が見えた。ところがここで不思議な現象が見られた。一度上がるかと見られた彼の体はもう一度何かに引きつけられるように再び水中に消えていった。そしてすぐにもう一度水面に頭から表われた。二度と消えることはなかった。その間ボートは渦の関係で現場から5mの所で静止していたので彼らを助け上げることが出来た。そのときはウェットスーツとライフジャケットという重装備であり浮力も15kgほどあったので浮き上がることが出来たが、もしも夏のようにライフジャケットのみであれば浮き上がるかどうかはなほ疑問である。このような水量が多い為に大波が立っている川においては命縄の必要性があると考えられる。しかし反面水量がきほどなく、岩などによって瀬になっている川は、むしろ危険であると思われる。というのは、転覆した際にロープが岩などにからまり命を落すことがあるからである。このことは法政大探検部の最上川における遭難が実証している。11時30分我々はボートを岸に上げ昼食をとった。たばこのないことが悔まれる。それから30分ほどで焼石の発電所が見えてきた。発電所からはさ出す水が伏水となりドドーンという轟音を立ててふき上げている。それを右に見ながらボートは進む、もう少しで今日の航行予定は終る。数分後目的地に着いた。出発してから3時間30分たった。さっそくタバコを口にした。セブンスターがうまい。これからダムを3つ越す為に焼石から国鉄を利用

し、下油井まで行きそこから1Km下流の名倉ダムの下に行き前もってテントを張っている田中と合流する予定である。2時30分ごろ田中と合流することが出来た。またこの地点で水野さんと合流することになっているので現地連絡本部に電話連絡し、キャンプ位置を確認した。しかし、その日は合流できなかった。

3月26日、雨の為沈することにした。さほど雨量は多くはないが晴れたり降ったりでぐずついた天気である。昼から例によって晴る飛驒特有の天気である。昼ごろ水野さんが表われた。どういふわけかいつもと同じ顔である。昨日の話を水野さんにさも苦労したように話すが、彼は笑いながら聞いているだけである。はり合いがないのには弱った。我々は協議の結果、ボートにザイルをまくことにした。これはもしも転覆した際に持つ所が今までだったら無いのだが、それをザイルをまく事によって補う為であった。この日から不思議な事にタバコが団体装備となった。この日の夕食の飯の量が少ないという不満が続出して一年の私は困った。しかし、飯の量は予定通りであり、1人だけ余計に食う御人がいるからこういう事になるのである。それはもちろん前田さんでありその彼が一番不平を言っていた。

3月27日 快晴 9時出発構成は前部は同じ後部中央に引地さん、左舷水野さん、右舷に前田さんである。田中に見送られて元気に出発した。流れが速く予定より早く白川口に着く。25日の時ほど波は高くないが田中と白川口で合流する予定であったが早く着きすぎたので第2予定に従い飛水峡に挑むことになった。1時昼食をとる。フランスパンとジャムのみこれにも不満が続出した。1時30分出発、流れ速く2時ごろ飛水峡入口に到着した。偵察で発見できなかった瀬を発見した。コースを設定し本流に浸入することにする。落差

1 m なんとか通過した。前方 200 m に勝の三カ瀬の第 1 の瀬を発見、予想以上の規模である。コース設定の為、3 人が見に行く、左岸近くから侵入することに決定した。左岸の方へ漕ぐ、さあ侵入だ。一瞬の緊張、波しぶきで前方を見ることが不可能である。ボートが U 字型に曲がった。次の瞬間前からの波によって真鍋がほうり出された。その時私は真鍋が落ちた事に気づき命縄の端を引いてはずれないようにした。とっさの行動だった。幸いにも彼はザイルをつかみ波にのまれずにすんだが、瀬の中に入っている為助け上げることは出来ない。やっと瀬の終りでボートに上げることが出来た。ボート内は水で満されてしまっただけでエアーマットも浮いてしまっている。流れの遅い所で水をかい出す、しかし、ボートは流れて瀬に近づいて行く、全部かき出すヒマもない。右岸も左岸も絶壁がせまっている、幅 6 m 水の音以外は何も聞こえない。恐怖をひしひしとを感じる。偵察時で発見した長い瀬が前方に見えてきた、予想以上に波が高い。途中でボートを止めることすら出来ない。コースの設定の余白もない。ボートがくるくる回る操縦もきかない。きわめて危険な状態である。たよりはボートの浮力と命縄だけである。囲りが暗くなって行く。日光が壁に妨げられて届かないのである。ボートは壁にぶつかりそうになりながら流れて行く。やっと流れの少し遅くなっている所に出た。水をかい出す合間に上を見上げると観光客や土地の人が何か我々を指さして大声で言っている。しかし、15 m ほど上なのと水の音で何を言っているのか分からない。彼らは笑っているようだ。流れはまた速くなった、飛水峡はまだ続いている。前方に頼らしきものが見えて来た。すぐ波が高そうである、もう突込まざるを得ない。ボートの前部が前にはね上がったと思うと急にガクンと下った。今まで経験した最大級の波で

あった。まるでボートが暴れているように見える。我々はボートを波に対して真直にするのが精一ぱいである。この波は発電所による波らしい、これも偵察では見られなかった所である。前方に瀬が見えて来た。飛水峡 30 分間、まるで一瞬の出来事のような感じだった。いつの間にか皆の間から話が始まった。

私は探検部におけるボート班というパーティの中で川下りを通じて、色々の川に接してきたが、常に川は顔を変え私を趣きのある姿で迎えてくれた。今現在アメリカ合衆国やヨーロッパにおいて川下りというものは人々に新しいレジャーとして見直されつつあり、益々栄えんになってゆくと思われるが、しかし、日本においてはまだまだ今からである。我々はもっと自然というものに接し、それを理解せねばならない。はたしてこの地飛水峡を下った人間は何人いただろうか。川の上には道路が走り、車の往来が栄えんであるが人々はこの川を見て一度は下ってみようと思った人がはたして何人いただろうか、はなはだ疑問である。私にとって探検とは何んであろうか、それは人々がまだやっていない事や人のまだ見たことのない地に行ってみることであるような気がする。そのようなものを今も探しながら今日を生きてゆく。それは人から見ると馬鹿げた行為かもしれないが、私はそうは思わないのだからこれで良い。馬鹿の少ないこの世の中だから、私くらいは馬鹿になってもいいだろう。

今このときも、どこか知らない地で、

1 本の山ゆりが私の訪れを

静かに待っていてくれる。

(社会学部 2 回生)